

ふるさとに帰るひとびと

小野 智昭

瀬戸内海の島に行った。何をしに行ったのか というと,もちろん瀬戸内の旨い魚を食べに, ではなく高齢農家の調査に,だ。

農村人口の高齢化問題は深刻だ。若者の流出 どころか子づくり世代が不在なために出生が少 なく、その上、残っている高齢者が逝って人口 数が減る地域が出ている。農業労働力の高齢化 もすごい。昭和一桁世代のリタイアは予想以上 に進まない。それを引継ぐ者たちがいないから だ。そこで注目されるのがいわゆる定年帰農だ。 しかしその実際は在村のまま、農業主 兼業 で非農業主 退職で農業主という比重の変化 がほとんどだ。

今回,調査した町はしかしずいぶんと違う。 島を出て都会で働いた人達が会社を定年退職して,なんと町に戻って来て農業もやっている。 正真正銘の「定年帰農」がそこにある。島は屋 代島(周防大島),高齢化が進んだ山口県の中でもトップクラスの高齢化地域。グループはすでに有名な「トンボの会」 U ターン者が組織するこの会は,かつて島から出ていった人達を島に呼び戻し,さらには段々畑でミカンをつくらせている。上は84歳から下は61歳の U ターン高齢者集団。その会長と世話役達のパワーはすごかった。

1988 年に 60 人程で発足した会がいまでは 130 人になっている。会員は農業者限定ではなく、非農業者も OK だ。「農業の」ではない、「地域の」担い手組織たらんとしている。毎年 U ターン者がいるから順調に会員が増えているのかと思うと、実はそうでもない。原因は鬼籍に入っての脱退だ。まさにショートリリーフの担い手達だ。でもそれを次々とつなげでいくことに意義がある。

それはいつまで続くのだろう。「昭和24年生まれまでは戻ってくる。」役員の1人が指摘した。水田での機械化は昭和34年から始まっている,そのとき10歳だった人達は農業経験があるから島に戻って農業をする,だがそれ以降

に生まれた人達は戻らないだろう,というのだ。「昭和34年」が画期かどうか定かではないが,動力耕耘機の普及をメルクマールにしての指摘だろう。将来の帰農可能性のキーは子供時代の就農経験の有無にある,これは自らの経験からする指摘だ。

では U ターン帰農者の子供はどうか。都市で働き家庭をつくった彼らの子供達は,都市で生まれ都市の生活しか知らない。子供世代には就農の経験などない。だからたとえ親達が定年帰農したとしても,その子供達までが将来,就農するなどという可能性は薄い。定年帰農したU ターン者の子供達が親の元へ来れば U ターンではなく I ターンで,彼らの就農があったとしてもそれは帰農ではなくて新規参入だ。U ターン農家には再生産の契機がない。

定年帰農者のメリットは何か。「知恵と暇と 年金がある」ことだと会長はいう。知識;彼ら の前歴は様々で,都会での仕事と生活で得た知 識と経験がある。暇;リタイアした身で,家あ り年金収入ありで生活に不自由はない。暇を持 て余すから農業ができる。そして年金:農業収 入を当てにしないどころか, 年金や退職金をつ ぎ込んで農業ができる。三つ目までくると,こ れを農業者と呼ぶべきかどうか迷ってしまう。 しかし非農業所得を農業につぎ込むのは兼業農 家の常だろう。農業の担い手云々の問題でなく、 農地を守る者、そして地域を担う者の確保こそ がむらにとっては重大課題だ。会が会員を農業 者だけに限らない意図もここにある。会社勤め は知恵だけでなく厚生年金をも彼らに授けた。 おかげで退職後に農業を続けられる。

さて,そんな帰農の前には帰村がなくてはならない。まずは退職者がむらに戻ること。都市に建てた家を残してまで,彼らをむらに U ターンさせるものは何か。

2 日間にわたる盛大な盆踊り。盆正月には戻る息子達が多い。定年者が出ると会の世話役達は彼らを熱心に説得する。むらに戻ろう,むらを担ごう,会に入ろう,と。農家は維持されるか,直系家族は再生産されるかどうか。そんな評論家的な問いになど一瞥もせず,会の世話役達は宗教団体の布教活動か,変人扱いされかねない熱心さで家々を回っている。U ターンがあるから会が存続し,会があるから U ターンが続く。そしてむらやいえが残り,ふるさとがあるから他出者が帰る。

彼らをふるさとに帰すものはなにか。振り出 しに戻るような疑問は残る。

温暖な気候と美しい景色のふるさとは確かにすばらしく、そして魚は旨いのだが。